

大本教と言っても、若い人はほとんど知らないでしょう。私が大本教のことを話題にすると、戦前生まれの人の中には「まだ大本教は存在しているんですか」と訊かれたことがありました。ことほどさように現在でも大本教の存在はとても小さく、希薄になっています。

➤ 聖師と慕われた王仁三郎

大本教は開祖と呼ばれている出口なおのお筆先から始まりました。京都の北部、綾部に住んでいた貧農出身で無学文盲の機織り女であった出口なおに、丑寅の金神という神がかかりました。精神分析の祖、ジークムンド・フロイド博士がいうところの、今でいう自動書記現象が起こり、神から「筆を持て!」と言われて書いた、いわゆるそのお筆先は、富国強兵政策を目指す日本の近代化への歩みに対する鋭い批判に満ちています。

その根本精神はまさに世直し宗教にふさわしく、私も魅せられました。このお筆先は現在、東洋文庫に『天の巻』『火の巻』という書名で刊行されているほどの豊かな内容と資料的価値が認められているものです。一昨年亡くなった安丸良夫氏（一橋大学名誉教授）の著作『出口なお』（朝日新聞社刊）は、出口なおの存在と意味、その予言者的な魅力を余すところなく伝えている名著だと思います。

大本教のもうひとりの教祖である出口王仁三郎は、大本信徒からは聖師と呼ばれて慕われている存在です。この開祖・出口なお、聖師・出口王仁三郎によって生まれた大本教は、戦前の1921（大正10）年、1935（昭和10）年の二度、帝国主義的な天皇制日本国家から弾圧を受けました。二度目の際は、亀岡の神殿などの聖地はダイナマイトで爆破されました。当時の大本教は革新将校なども入信するという存在感ある宗教団体としてあり、体制側が危機感を持っていたのでしょう。

➤ エスペラントと大本

王仁三郎は1871（明治4）年、京都の亀岡市の穴太あなおに生まれ、本名は喜三郎きさぶろうという名で、「きさやん、きさやん」とみんなから親しまれていました。その喜三郎も霊的な能力があり、神に祈っていると、「一日も早く園部に向かって行け」という神示が現れました。

彼はお齒黒をつけ、陣羽織という異様な格好で園部方面へ出発し、出口なおに出会います。なおも当時、神のお告げで「東からやってくる人」が、自分に懸かった神を審神にする人であると信じていたのです。

なおと喜三郎との出会いはまさに神の縁ともいふべきなのかもしれません。そして喜三郎は、なおの末娘であるすみと結婚し、喜三郎は名前を王仁三郎と改名しました。王仁三郎となおの結びつきで大本は教団として出発し飛躍的に発展しました。

通常、大本がエスペラントを導入するきっかけは、バハイ教との関係だとよく言われていますが、実際はそれ以前に王仁三郎はエスペラントを知っていたようです。

『反体制エスペラント運動史』（大島義夫・宮本正男著・三省堂刊）によれば、宮本が戦後、王仁三郎の懐刀といわれた教団幹部の大国以都雄に尋ねたところ、1918年（大正7）年、信徒の秦真次はたしんじがヨーロッパ視察から帰ってきた時、エスペラントをポーランドで知った、と言って王仁三郎に話したことが始まりだということです。

鋭い直感力を持っていた王仁三郎はその時、エスペラントの可能性を信じたのだと思います。秦という男は当時中佐、後に中将になった軍人、いわゆる革新将校でした。

➤ エスペラントを採用するバハイ教と大本

その頃王仁三郎は、役員の一部に「エスペラント

第22回 中国の大連に飛び立つ 出口王仁三郎

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓（おおるい よしひろ）

混沌の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ!」

は世界を支配する言葉になる」とも話していたようです。また1920年の春、東京の各所で大本の講演会があった時、熱心に聞いていたのはエスペ란ティストであり、詩人のエロシエンコだということです。（『日本エスペラント運動の裏街道を漫歩する』（小林司・萩原洋子著・エスペラント国際情報センター刊）

ロシアからやってきたエロシエンコはその後、大本本部を訪ね、エスペラントとの繋がりができたようですが、しかし実際にエスペラントを教団で奨励するようになったのは、やはりバハイ教との関係が大きいでしょう。

1922年、王仁三郎の妻・すみが静岡県三島から大仁おおひとに向かう車中で、アイダ・エ・フィンチというバハイ教徒のアメリカ婦人と出会いました。バハイ教は19世紀の半ば、ペルシャ（イラン）で生まれたイスラム教の改革派の宗教で、エスペラントを国際語に採用していました。ザメンホフの娘のリディアも最後はバハイ教に入信しています。

バハイ教のフィンチ女史は当時66歳。そして翌年の春、バハイ教のルート嬢とともに大本本部を訪れます。フィンチは、バハイ教ではエスペラントを国際語に採用していることを話したところ、王仁三郎のエスペラントへの関心は更に高まり、側近の加藤明子にエスペラントの学習を命じました。

京都の同志社大学致遠館での講習会があると知った加藤はそこに参加してエスペラントを学び、大本にも研究会が発足しました。王仁三郎もエスペラントを熱心に受講し、後に王仁三郎らしく、『記憶便法エスと歌辞典』を出版するほどでした。例えばその辞典では、牛乳はエス語でlaktoと言いますが、〈乳牛の乳汁多く搾らんと餅米喰わせば楽らクト（楽と）出る〉とか、mateno朝という単語では、〈朝寝して一足おくれ停車場へ友のあとから一寸マテーノ〉といった調子です。しかし明らかに軍国主義的な色あいが強い歌もあり、その点で宮本らは、世上いわれるように大本は戦前、決して平和運動一色ではないと厳しく批判しています。

また、「満洲国建設」に絡んで王仁三郎に対する

疑問が一部には出てくるのでしょうか。前出の『反体制エス運動史』ではこんなくだりがあります。

宮本「ところで、橋本大佐らの十月事件は、のちの「満州国独立」に結びつくものですが、大本がこれ

を支持した形跡が残っていますが・・・」
大国「そうですね・・・満州国についての大本の役割はそうです、石原莞爾がはっきり依頼したのでしょうが、『満州がいよいよ独立する。そのときにはエスペラントを採用する。これを満人に教えるための教師団の編成を大本で引き受けてもらいたい』というのが、この事件と大本とのすべてでした」

石原は東条英樹ら軍の主流派と意見の対立から満州から追われ、王仁三郎の満州国へのエスペラント導入は破綻したということです。

➤「日本人」を超えた王仁三郎

豪放磊落、ユーモアもあり日本人的な発想を超えスケールが大きい王仁三郎に魅力を感じる私ですが、この満州との関わり、大本第一次事件後の蒙古入りについては、私もまだ納得できないところがあります。

しかし、四代目教主の出口直美の婿にと、王仁三郎から強く要請され出口家入りした出口栄二が出征する時、王仁三郎に挨拶に行き、『一生懸命、お国のために闘ってきます』というような言葉を述べると「この戦いくさは、悪魔と悪魔の戦いじゃ。早はやう帰ってこい!」と、栄二に対して強く言ったそうで、この事実を直接私は、出口栄二氏から聞きました。

歌をたくさん詠み、高名な陶工から、耀椀と名付けられるほどの素晴らしい陶器を創り、また書でも凡人の域を大きく超えた王仁三郎の芸術家として側面を見ると、当時の一部の軍と一見同調するような動きをどう見るかは難しいところです。

それはさておき、今でも大本教団では信徒にエスペラントを奨めています。そしてエスペラント世界大会には大本は必ず、OOMOTOコーナーを設け、仕舞などを披露し、信徒の何人かは必ず参加していますので、世界のエスペランティストの間では、大本教は日本の宗教の代表的な存在に見られているようです。